

う
な
ず
く

本年四月、浄土真宗東京ビハラの発会式が、築地本願寺で開催されました。ビハラとは、サンスクリット語で「休息の場」「安住」の意です。

ビララの活動としては、ホスピス活動と内容的には、ほぼ同じですが、大きな違いとしては、お念仏の教えを基に『老』『病』『死』の問題を真剣に捉え、老の悩みに、病の苦しみに、死の恐れに対し、共々語りあい、末期癌患者の方には寄り添い、最後まで看取り、老人の方には心の友となり、老人や患者の家族の方の悩みも受け止めながら、生命の尊さ、心の安らぎを持っていただくために何が出来るかを考え、実践していく会なのです。

発会式にはアソカ園園長近衛正子氏の基調講演がありました。その話の中で特に、感銘深く聞かせていただいたきとばに「うなずく」というのがありました。

老人は寂しいのです。話す相手が欲しいのです。唯、話しを聞いてほしいのです。「そうですね」「そう」と、共感、共鳴し、うなずいてもらいたいのです。聞き役に徹して頂きたいのです。老人はたしなめられるのを、とても嫌います。理が通れば通るだけ、依怙地になり、不機嫌になり、逆効果になります。元気づけ、励ましていただく前にまず「うなずいて」「みとめて」いただきたい。そんな話でした。

一昨日十四歳の少年が両親と祖母を金属バットで殴打し、出刃包丁で刺殺したとのショッキングな出来事が報じられました。動機が何であったかは今後明らかにされることでしょうか、ただ、一つはつきりと言えることは、この少年と、両親（特に母親）との間に、「うなずき」あう場がなかったということでしょう。家に帰ってもうなずき、認め、励ましてくれる人がなく、代りに叱責が待っていたとすれば、十四歳という年齢からして考えられる不幸な出来事であったのかも知れません。